

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子

15-1

辰巳が弄する早回し動画のコマ送りまがいの事態が生じているにも関わらず、麻里子は心の動揺を隠しているのか、いともあっさりホテルの予約を引き受けてくれた。しかも眼で微笑しながらだったので、まさか眼底に二つの月が浮かんでいることなど、わかろうはずもなかった辰巳は「ありがとうございます。よろしく頼みます」と礼を言うしかなかった。

予約を入れに出で行った麻里子の浮遊する夢のような薄寂しい風情を添える残像を追っていた辰巳は、なぜか、映画『雨月物語』の登場人物の源十郎を自身に、若狭を女杜氏に置き換えてしまっていた。

「これからすぐにでもチェックインできるそうです」と間もなく戻ってきた麻里子に言われたおかげもあって、辰巳は怪異な他界から現世に呼び戻された。

「明るいうちに、米焼酎の熟成部屋を見せてもらいたいのだが……」と辰巳は半覚醒状態から抜け出そうとして、居丈高な言い方をしていた。

「はい？……。あっ、はい。わかりました。ご案内いたします」としどろもどろで答えた麻里子は、それでもいよいよ本題に入ることにすぐ思い当たった。

『W酒造』は、およそ3千坪の敷地に6棟の蔵が点在していて、現在ではその内の4棟が稼働している。

敷地内を麻里子と同行していた辰巳は、巨木の紅葉の下に停めてある紅く色づいた落ち葉がシグナルレッドの車体に降り積もっているベンツE320を目にして立ち止まった。

「楓かな？」と見上げながら尋ねた。

「フウの木です。カタカナ名です」と麻里子は言った。

「フウの木？初耳だね。それにしても見事な紅葉だ。……貴女の車ですか？」

「義姉の車です。義姉は今、体調を崩して入院しています」

「そうですか」と辰巳は言って、それ以上のことは訊かなかった。

4番蔵の西側に建っている石材を馬踏み目地で積み、重厚な外観の5番蔵の前まで来ると、女杜氏は白衣のポケットから鍵を取り出して入り口の重いドアを開けた。

中秋の微風に酒の香りが躍り出ると午後3時過ぎの明るさが蔵に差し込んで、中の一部分が眠りから覚めたかのような体を成した。

電気が点けられると、2列に計6本の柱を並べてある蔵の内部が現れた。

木骨石造の蔵の中の左右には減圧単式蒸留装置や貯蔵タンクが並んでいた。

「これから地下にご案内します」と言った麻里子は3本目の柱の辺りにある階段を、先にゆっくりと下りて行った。